

ラッセル・B・ナイ

『ウィリアム・ロイド・ギャリスンと
人道主義的改革者たち』

Nye, Russel B.: *William Lloyd Garrison and the Humanitarian Reformers*, Little, Brown and Company. Boston. 1955. p. 215

1

Oscar Handlin 編集の *The Library of American Biography*¹⁾のなかの1冊。

著者の Russel B. Nye については、詳しくは知らないが、げんざい Michigan State College で英文學を擔當し、傳記部門でのピューリッツァー賞の受賞者ときいている。本書のほかにも、南北戦争前の奴隷制廃止の問題と市民的自由の関係をあとづけた *Fettered Freedom* と題する類書を、1949年に公けにしている。

イギリス本國の植民地支配という外部からの壓力と植民地における封建制という内部の壓力に抗して、全世界にさきがけておこなわれたアメリカ革命(1775~83年)は、その先進的性格にもかかわらず、アメリカ南部の奴隷制度を廢絶することができなかつた。Jefferson が起草した最初の獨立宣言草案のなかに、奴隷貿易は「人間性そのものに反する残忍な戦争——生命と自由にたいするもっとも神聖な諸權利を侵害するもの」として、はっきりと奴隷制度を否認する一節がしたためられながら、プランターらの反對のために出來あがった獨立宣言からはついに削除されてしまったばかりか、のちに憲法のなかにこの制度が容認されるに至ったいきさつは、この間

1) 未刊のものをも含めて、次のようなものがある。
Bruce Catton, *U. S. Grant and the American Military Tradition*.
Donald Fleming, *William H. Welch and the Rise of Modern Medicine*.
Richard W. Leopold, *Elihu Root and the Conservative Tradition*.
Jeannette Mirsky, *Elisha Kent Kane and the Seafaring Frontier*.
Verner W. Crane, *Benjamin Franklin and a Rising People*.
Oliver W. Larkin, *Samuel F. B. Morse and American Democratic Art*.
Samuel R. Spencer, Jr., *Booker T. Washington and the Negroes' Place in American Life*.
Richard N. Current, *Daniel Webster and the Rise of National Conservatism*.

の事情を象徴的に物語っている。それにもかかわらず、建國の父祖たちとよばれる數多くの良心的なひとびとは、當時、奴隷制度が、やがて經濟的に自然に消滅するであろうと考え、またそのように期待した。

だが、イギリスにおける産業革命の進展——増大する棉花の需要と、とりわけ Eli Whitney の棉繰機の發明(1793年)は、かれらの期待を完全に裏切り、事態を一變させた。このときから、アメリカ南部の奴隷制度は、はっきりと棉という王様 King Cotton の家臣になってしまったのだ。棉花生産は、とみに上昇した。これと歩調をあわせるかのように、奴隷數は増大し、奴隷制度は擴大・強化された。そして、最初、南カロライナとジョージアからはじまった棉作地帯は、急速に舊南部 Old South から西方へと擴がって、1830年代には、ほぼ今日みられる黒人地帯 Black Belt が、はっきりとかたちづくられることになったのである。

事態のこのような推移のなかから、従來のさまざまなかたちの微温的な奴隷制反對運動とは、本質的に異った、あたらしい型の戰闘的な奴隷解放運動——奴隷制の即時無條件的廢止を唱える Abolitionist (Abolition) Movement が生れてくることになる。William Lloyd Garrison (1805~79年)こそ、この運動のもっともすぐれた先驅的な指導者、abolitionist のひとりである。

2

周知のように、獨立戦争以降19世紀前半、とりわけ Garrison がもっとも輝しい活動を展開した30年代、40年代を中心とする、第2次對英戦争(1812年)から南北戦争(1861~65年)までのアメリカは、この國の中産階級が着々と社會的指導權を握るに至る過程、この階級の自覺にもとづく思想の分野が國のあらゆる生活面に決定的な勢力をもちはじめた擡頭期であって、文學史上ひろくアメリカ・ロマンティシズムの時代とよばれているとおり、Vernon Louis Parrington のいう「のほうずな青年期 a period of extravagant youth——エアロンの杖にも劣らず數々の不思議をおこなったところのロマンティシズム崇拜に耽った」(*The Romantic Revolution in America*, Introduction)「若きアメリカ人」(Ralph Waldo Emerson, *The Young American*)の「多辯の時期 the hot air period」(經濟史家 John Commons の言葉)であった。そこでの中心的課題は個人の覺醒にもとづく社會正義と理想主義である。西部開拓農民の社會的發展や北部における資本主義の成長やすでにみた南部棉花王國の強化などは、これらの風潮を決定づけた基礎的な力であったが、政治の面でも、Andrew Jackson

の名にむすびついた Jacksonian Democracy を出現せしめて、この時代の華々しい民主主義的な社会改革運動があらゆる分野にわたって展開されることになる。

著者の Nye は、正當にも、本書のなかで、この時代の奴隷解放運動を、以上のような廣汎な民主主義的改革運動の一側面として把握し、したがって、また abolitionist たる Garrison を humanitarian reformer のひとりとして把握した。「ウィリアム・ロイド・ギャリスンと人道主義的改革者たち」と題する表題にも、示唆されたこの立場が、本書の基調になっている。この場合、著者は、Garrison の生涯を年代を追って記述しながら、それぞれの時期におけるかれの仕事や世界観——その中心は、いうまでもなくかれの立場からする奴隷制廢止論 abolitionism——を軸として、それとの関連において當時の奴隷制廢止運動の一般的ながきと南北戦争中ならびに戦争直後までの黒人に関する諸問題をあとづけようとした。

全體が7章²⁾、それにプロローグとエピローグ、ほかに編集者 Handlin の序文と文獻解説をふくめて200頁餘りで構成されている本書は、内容的にみれば、大きく4つの部分にわけられる。第1の部分は、Garrison の生誕から1828~9年に Benjamin Lundy に見出される頃まで。これは、本書の第1章に相當する。ここでは、1805年12月10日³⁾にマサチューセッツのニューベリーポートでかれが生れると間もなく、大酒飲みだった船乗りの父が家を捨て、ために貧しいながらも高潔で敬虔な母親の手で育てられた幼年期から、植字工として働きながら勉強をつづけ、やがて *National Philanthropist* の編集をしたり *Journal of the Times* の仕事をしているうちに Lundy に見出され啓發されて、當時 Lundy がボルティモアでやっていた *Genius of Universal Emancipation* を手傳うようになるまでの生いたちが述べられている。

2) 各章の見出しは、そのときどきに Garrison が述べた有名な言葉からとってある。たとえば *Liberator* 發刊のとき(第2章)とか臨終のとき(第7章)とかにかれが書いたり言ったりした言葉から、といったふうに。

- Chap. I My Name Shall Be Known
- Chap. II I Will Be Heard
- Chap. III Ours Is a Moral Crusade
- Chap. IV We Have Made Clean Work
- Chap. V No Union with Slaveholders
- Chap. VI It is the Bright Noon of Day
- Chap. VII To Finish It Up

3) 本書では12日となっているが、Richard B. Morris ed., *Encyclopedia of American History* や *Encyclopaedia Britannica* では10日となっている。

Lundy はクエーカー教徒で、奴隷の漸次的な解放 gradual emancipation を唱え、また1816年に Robert Finley らに唱道されて設立された American Society for the Colonization of the Free People of Color of the United States を機に、10年代後半から20年代へかけて急速に發展しつつあった、自由な黒人をアメリカへ送りかえし、そこにかれらを植民させることを目的とした Colonization Movement にも共鳴していた。だから Garrison は、最初、gradualism を信奉し、Colonization Movement にも共鳴して abolitionist としての出發を開始したわけである。だが、Garrison は、すぐにこのような自分の考え方と訣別した。1829年の William Goodell との論議が契機となった。gradualism から immediatism へ——、奴隷制の即時無條件的廢止を唱える Garrison の abolitionism は、1831年1月1日のあの *Liberator* を生みだし、32年1月には New England Anti-Slavery Society を、つづいて翌年の1833年12月4日には American Anti-Slavery Society を設立せしめるにあたって、偉大な役割を果たすことになった。アメリカの奴隷制廢止運動は、このとき以後、全國的——ときとして國際的——な規模で強力に展開される。

第2の部分は、Garrison の最初のイギリス訪問(1833年)をふくめて、この間の事情をとりあつかった1830年代のはじめから、1840年に American Anti-Slavery Society が分裂する頃まで。本書の第2・3・4章がこれに當る。この時期は、Garrison が、その生涯で、もっとも輝かしい活動をおこなったときで、かれの abolitionism はこの期間の *Liberator* と American Anti-Slavery Society の歴史のなかに、くまなく展開された。ここで、Garrison の abolitionism を詳しく述べている紙數はないが、ひとくちに immediate and unconditional emancipation といっても、その方法において、*“moral suasion” “noresistance” “nogovernment”* を堅持していっさいの政治的行動を否認したかれの antipolitical な立場が、教會や婦人の權利をめぐる諸問題ともむすびついて、Garrison のプチブルジョア的な急進主義・派閥性を生みだし、けっきょくは、これが American Anti-Slavery Society の組織と奴隷制廢止運動のなかでの統一を破壊し、いっぽう政治的行動に訴えようとしたひとびとは、James G. Birney らを中心に Liberty Party を結成して abolitionism を政治の前面におしだしてゆくことになる。

第3の部分は、奴隷制廢止運動のなかにあらわれた分裂、このようなふたつの傾向がますます擴大されてゆく

ながで、Garrison 派の手に歸しはしたけれど以前とは比較にならないほど勢力の弱くなった American Anti-Slavery Society と *Liberator* とを無臺に、南北戦争勃發までの Garrison の abolitionism がとりあつかわれる。第 5・6 章がこれに當る。ここで Garrison の無抵抗・平和主義や反政治主義は、奴隸制を容認する合衆國憲法の否定——かれは憲法を「死との契約、そして地獄との協定」“a covenant with death, and an agreement with hell” と罵倒した——したがって、またこの憲法を基礎にしてつくられた連邦の否認 disunion すなわち北部と南部の平和的な分離 peaceful separation of North and South の主張となつてあらわれる。そこでこのスローガンは、「奴隸所有者との統一はない!」“No-Union with Slaveholders!” である。最初 Garrisonian として出發した黒人 abolitionist の Frederick Douglass が、みづから *North Star* を創刊して Garrison から離れていったのは 1847 年 12 月 3 日であった。

歴史はこの期間に数々のできごと——テキサスの奪取 (45 年)、メキシコ干渉戦争 (46~8 年)、あらたに制定された逃亡奴隸取締法をふくむところの Clay の大妥協 (50 年)、カンサス・ネブラスカ法と共和黨の誕生 (54 年)、Dred Scott 判決 (57 年) John Brown の武装蜂起 (59 年)、Lincoln の大統領當選 (60 年)——をのこして、南カロライナを皮切りとする南部諸州の連邦離脱をへて南北戦争に突入することになるが、このような社會的變化——南部の侵略に直面して今や abolitionism はすぐれて政治的性格をおびた國民的運動の原理として發展する。戦争勃發とともに Garrison の反政治主義や無抵抗・平和主義にもかなりの轉換が餘儀なくされる。そして、62 年 9 月の豫備宣言をへて 1863 年 1 月 1 日に奴隸解放宣言が正式に發効した直後、これを祝福するマサチューセッツの大衆集會で Garrison は叫ぶ。「30 年前、それは奴隸制に反對するひとびとにとって、眞夜中であつた。だが、今や眞晝だ! 眞晝の太陽がきらきらと輝きわたっている——。」

このとき以後、Garrison の活動は、とみに色あせてゆく。反對に、かれの名聲は、いや増しに増す。戦争の終結、そして憲法修正第 13 條の成立。使命は終つた。奴隸制は打破されたのだ! かれは、そう考え、そう行動した。第 4 の部分は、American Anti-Slavery Society の再度の分裂、*Liberator* の廢刊 (最後の號は 1865 年 12 月 29 日) をへて 1879 年 5 月 24 日に 74 歳でかれが死ぬまで。最後の第 7 章でとりあつかわれる。ここでは、解

放された黒人の問題をめぐって、Garrison の思想上の、また行動面での後退が、長期間にわたつてかれと主義、行動を共にしてきた Wendell Phillips のそれとの對比において述べられる。Garrison の限界である。この部分は、とくに私の關心をよび起した。というのは、著者じしんそのことには一言もふれていないけれど、Garrison の限界は、第 2 アメリカ革命としての南北戦争の限界——もつとはっきりいえば革命の不徹底さ或は弱さ——と一致し、したがって Garrison のイデオロギーは、せんじつめればこの革命の指導權を握つた産業資本家の利益に、その枠内で、十分に奉仕しえたとおもわれるからである。そして、このことはまた、著者じしんの意圖とは別に、のちのアメリカ史家たちが、この革命をさらに前進させようとした Frederick Douglass や Wendell Phillips や Charles Sumner や Thaddeus Stevens などの指導者たちにたいする白眼視とはちがつて、Garrison に實際以上の評價をあたえがちな一般的傾向をも説明してくれているようにおもわれたからである。

以上みたように、本書は、この時代の奴隸制廢止運動、とりわけ American Anti-Slavery Society の歴史をしろための、てごろな案内書である。それを Garrison の abolitionism を軸としておしえてくれるのだが、その敘述はきわめて客觀的で、その意味で、本書の價値と出版意義は十分に認められていい。しかし、Garrison の abolitionism やかれの思想そのもののより深い展開は、本書のような小冊子では、期待するほうが無理なのかもしれない。最後に、いくつかある注文のなかから、ひとことのべさせてもらうならば、全般的に社會・經濟的事務がほとんどかえりみられていないため、たとえば Abolitionist Movement にしても、それじたいのうごきはよくわかりながら、それが、どのような条件のなかから生れてきて、どのような物質的基礎をもっていたのか、また第 2 アメリカ革命といわれる南北戦争にたいしてどのような役割をはたしたかなど、ひとくちでいえば、この運動のもつ歴史的意義や規定が、はっきり出ていない。(このことは、いま私がのべた敘述の客觀性ということとも無關係ではない。) おなじことは、Garrison の abolitionism や思想についてもいえる。したがって、著者が本書のなかであたえている Abolitionist Movement における Garrison の位置づけや評價は、この點のもつと深い掘りさげがあれば、より説得力をもつものとなつたであらう。

(本田創造)